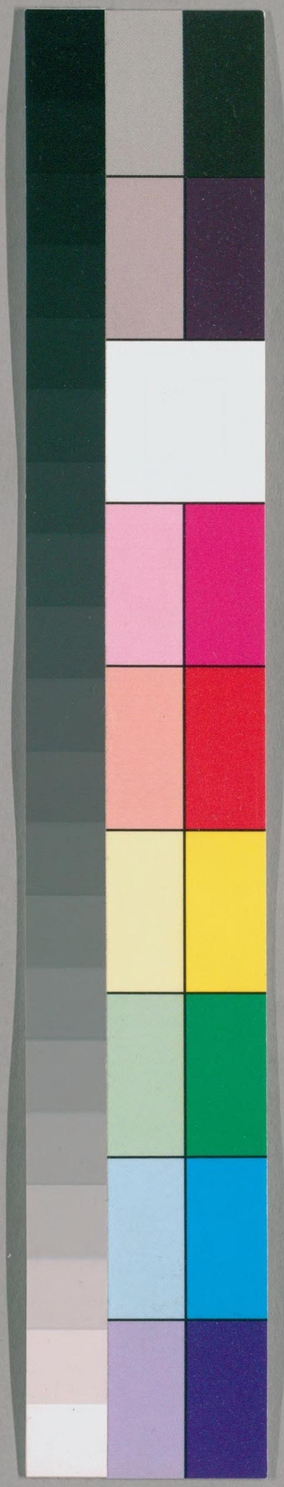
# 芭蕉翁發句集 上下

863
104



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104

ガラス使用

863-104

小松亭
紫水

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』　請求記号 863-104

ガラス使用

風狂さこやりぬとこのや志うて今よりてる多
ちのく俳諧紀風雅を学ふりの一史義乃風狂を
志ふにさるをあしこのみて志うに芭蕉翁の世より人
口よ勢矣せるそ元禄のむかし史邦か小文庫
又芳この笈日記乙州か笈の風狂治船集の類乃猪集よあつめし家ゝ
ふるへしそれ猪集の句を集めて追よ多を附多
後元文のひ義雀と之る人ゝ芭蕉句選と題
する



書あり世の人ゝ之ゝ多こゝ句選よ多ゝ
されそれ書杜撰ゝして他の句を載て義乃
句とちせるの類多くちんぬ志と乃よ考ゝ
依丹ゝ田植乃句を義の句と志也ふを風ふ治
船集よあるゝ志しゝ志ゝ志ゝ亜の門人さへこのくゝ
いそんや後の世乃句選のあやまりさふるへし
まゝ句選といへる題号ゝ志ゝ義の秀逸ゝ句を
選ゝ志ゝ志ゝ一代乃家の集るへきをゝ志ゝより

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

春のいそぐ心情を述べて種林が風体
こゝに孤吟の句詩をも混じてそも〳〵和学の
人も発句といへるもの始末風体のかゝりを是を学ぶ
俳郭の当をおやする人多しむかしも素のごとく
時代風雅次第〳〵に変じ。栗にうつりてを
このゝち又はく変じ奥州行脚より都へ越
多中ひろき当門の誹諧ともに一変も我等発を
幻住庵小春ひ猿蓑ともに称会を更て略を此趣を
あらわ



飄然笈を負より甚度又一ツの新風を起す
炭俵続猿蓑是等又日様猿蓑集に前を
先師と実称の風ありていまだ誹諧のひろ
さ発句をとくくうと云風ふるいへるまゝ蕉の句
諸集よりやゝ中に古来真享元禄乃句あり
最近来の吟風も時代の新古を考ふれて
最乃変化流行の次第をもうるべき義に句
ともとてむかし時流行にさかひを改ま

今秋鰡とちる迄那て血脇を浮るそ秋流行
いさゝれし澁をほてまゝ
陽よりろり多載ふ易の秋や
大し免て為秋情を志ふて
分別よ迄をつくへきるろ
るへし
梅をるき史人とれり
そ秋るの忘うるく

寫しそめ給ひし共國人
師の話ひとり元禄七年秋
さくら記し置る書なり傳寫し
出してあるへき旨
蕉門人多き中も土芳を同
齋友の考しるそれ
を傳へてその道の誠を
まく皮をえ肉をはるのみ
道を貴ふ事とし名利
うしちふるを土芳深く歎き
此書をしもつ生涯
几机下におくしてうも人
他見有間敷といへとも
俳の行て文庫にひめ置る土芳自筆
しむるに寫くる書よ一點も
丸る四方よ高英の雅志
墨付四十丁餘唐様にて
和漢五六冊あるよ一通

元禄甲申庵より深川に移て秋底を志の深きを
十月十日の夜粟津の草庵に通夜して終夜前よ
此書を出しいとまを乞ふ十年懐旧の涙をそゝ
てく思ふにこの世乃窶をくやむも我身
俳とをさとりえざるの拙きを恥るのみ老人も
今をこゑむとうむこれ人とともにおくとなく鏡をの
死をまぬかれざるものを空しんこと
なかるまの功徳をつゝとやそれ多幸を芭蕉



書此肖像を生きてこの社なる
集の句をこの舎の諸集よ載るを書於墨染
る男に筆ばらせて百世乃明鑑よそなふる
おちぶし



安永三午歳如月赤日東山雲峰の里
乙針菴北伴窓にて
蝶衣述

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

芭蕉翁發句集上

延寶天和貞享中

庭訓の姓未だ定まらず文鳥もまた其の春
雨もまた生涯軒乃雛かな
湖水の時仁老を先とせん
我庵や蕭条として山も月
湖水の月や出湖の五十一箇條



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

物ふりてうたてもあるか梅の花

梅ちりてうたてもあるかきのふけふ

梅が香や夜もすがら聞く人もなし

この梅に牛も初音と啼つべし

鶯や茶を喜ぶも雨の朝

鶯や餅に糞する縁の先

元日や都の空も人ごころ

二日や都の空も人ごころ

三日月や都の空も人ごころ

江川菴

名月や池をめぐりて夜もすがら

名月や池をめぐりて夜もすがら

名月や池をめぐりて夜もすがら





秋風の吹くや何処に相撲取

秋風の吹くや何処に相撲取

秋風の吹くや何処に相撲取





秋風や藪も畠も不二の形

秋風や藪も畠も不二の形

秋風や藪も畠も不二の形





秋風や酒肴に騒ぐ法師ばら

秋風や酒肴に騒ぐ法師ばら

秋風や酒肴に騒ぐ法師ばら





秋風や白木の弓に弦はらん

秋風や白木の弓に弦はらん

秋風や白木の弓に弦はらん





秋風や数珠懸ながら珠を刻

秋風や数珠懸ながら珠を刻

秋風や数珠懸ながら珠を刻





秋風や硯に動く薄紙

秋風や硯に動く薄紙

秋風や硯に動く薄紙





秋風や机に動く薄紙

秋風や机に動く薄紙

秋風や机

依依ト中山ヲ
春ヲ
ヲ
ヲ

花ようき世衆酒白く飯黒し

素堂も七ツ年増や盧山の雪

艶ならむ やりこ花見も雨の内

雨乞の頭巾おもふ法の声

笠履の風形てる月も合佛 ト云楽

世みさごの伝来も山吹折髙菜の花乃くさ〳〵

三聖人此圖

月並乃こゝろ也梅の花咲と

おとろきまて山月を梅の花咲と

清く吟ん耳に音焼る郭公

青さ也菊の葉餅の穂す出ん

白妙の也村雨乃花の咲つゞむ

乃新酒白く秋の淡菜に残暑

松風乃高麗うつ水の音すし

ゆう皆を四角に影を窓の月

畫讃

馬おくれ 花を踏るゝ夏野哉

江上の破屋を思ふ夜風の蚊

そう波亭ゆう

法師集、冬神ぶと有
志ゆこそしめる立る
おくれ我を給る
心乱と有しと

秋ぜともしも心ぼそからん

秋ぜともせうそくして江戸をさる日

関こゆる日は雨降て山ろかすむ

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

富士川を舟ふなばたをうつ波の

波あり出川乃里数ふるしき世の

泊をしのぶ遊女の名も

すり流し小森も見ゆる月の前

秋の風こよひやちるらん物の音

去来と猪を

猪をきく人捨ん山の

泊船堂にて

眼前

道の一乃木槿を

馬よ森う猪の

杜牧が早行

馬上

馬上

馬上

花表の傍かぜくらく雨降て
くるゝやい上もなき峰の松風
志ゐをれうの涼をいとふ
三十日月ふしみと也
西行谷の蘭よ流れ女と北
芋洗ふを見るに
芋あらふ女西行ならん歟
二見の浦すてゝ
硯こそ石に変れ
ある茶店の傍よ
ひろふやまもゝに
只そう侍る
秋風や酒肉に臭き
まつを今ぞ
先の句しも
そも此
頭巾
おのしきまゝて言出す頭よ
いるゝ言の
菊花薬の
と云句を前書

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

登り起美人の圖と
前書あり

蘭の香や。蝶の翅もたきものす

閑人庵牧童をそしる事

葛猶多味四五本乃あるしの說

長月朔こゝろうべる北窓乃
萱ぐさも霜枯そめて今ぞ秋と風

ゆるもむしにそゝろをはらふ扇賛

白く屑敏よりそきく衣にうつるとのゝ
言て詞をあまさに兎状守袋より而
出多母のかゞ髮よ浦路うるむ

玉箱迄うつす眉も中老うとおもふ 注文

多のそゝ丈消ん涙そあつき秋の雲

大和の國よ行脚して休の角とふ

行よふ原也雲も多里ゝ四里あり

跡市廿許にて芭蕉休奥

當麻寺へ詣て庭上乃松ともる

凡ものとも也ものとも云へん礼非情ふへとも

うつくしさよ

佛隣よのれ礼を拝仕ぬ袈裟をかけまゐらせて尊

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

俤葬いく死の底 清秋
芳野そあはれ一夜の
碪うつくわれよ聞をも知坊ら書
西上人おもの菴乃跡を奥
隆ち二町をもる入とやくしの
清水あるむしにうゑもみじ
いもやくくこゝろ
寒さくこゝろ
後醍醐帝北清涼を葉む

一ツ松に居庵をもとむる

隆庵年を経て老のふを何を君
大和より山懐を経て近江に入て
義湍よりに今を山中を経
いまへ共巣盤ら墳あり伊勢乃
守我らいひふ義朝とのよ
秋風をや乱の散ら
義朝乃心よ
不破
秋の蝉や家も畑もふ破ぬ関
大垣よりふ夜を木母ら家を
立ともに越前を出て舟

後の旅を死よと云ふ事也
万葉集よ秋の永とす

心よおりひろふ柏さくら哉
死もきめぬ柏屋の春
笈日記古益亭と有　秋の永

来客なき雨まそ
名牡丹の鳥よ雪のおとゝきを
茶の花よ寂あきてやさかのくきに
漬乃方へ咲地気をわすれ畫つく
志ゐてそし先生を指すこと一寸
曙や白魚しろたこと一寸
熟田よ詰りし社頭大なる雄水築地や
多ふ花子茶むにうこと
志のふるく柏子　餘ての如し

名護屋へ入る道のそと泯吟也
木ずゑ折ふ方をうしの
草枕犬もしくるゝ夜寒哉
志ゐてそし先生を指すこと一寸
雪なをりきて抱月亭
泊船ろろもち
帝人ついて是うらんを扨傘
旅人を見る
馬ともさくもうるものあるこれ
海遠よ日うしろ
海永き暮ぬ白し
林氏桐葉のぬしさし浅う

さりくれハ暮ぬそんとせし夜よ

戊海よ雪ハ根こ雑こを捨ん笠しくれ

庸中

葉のむさくるしくても芭蕉哉

鍛治出羽守氏雪まつ

面白くしてやちん処哉雨

杜心亭こて申あま人おもてなし

雪つくろひ宵

雪と雪今宵ハ逢ぬ名月ろ

等根こそ人もあるらしき秋の雪

逝ゆく秋ぬ鮭鈎ろ物す七里まて

気くて鍛冶を木兎の俤夏ろ

爰にわらぢをぬぎうしなふ我

袴を脇ばさみに雨ぬ

年ろ惹ぬ分ハ生ろ着てやちんぬきまろの

負享二丑歳

山家よ雪ろ

誰聲ろ遠ハ栗小餅あふらし秋

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

伊賀北
猶うまで古
子日
素
春
二月
梅
山
梅

鄙男まうでおくれ侍るを悔さく

笋好

菜畑に花見顔なる雀哉

此ほとりに茶人土芳

大仙寺にあふ

高野より帰る法橋梅の事

伊豆の国蛭の小嶋乃素門

ふみもまだの秋より行脇うるた

郡名を聞てなつかしの札をこゝろ

と尾張乃国にあふよて

来りぬ八

いさゝた 稿 麦ふくん多 松

此俤我も古人の園賞る大顚

和尚こゝろも月もさ急迁化

殊ふかしまよ愛おいやをる

事り道も其角方へ申ふ

梅盛り 和の家あも 流の 社

流ふくふ 桜 花乃 油よち

鳥の出も不曾や四月乃 梅う

如是亭庭前こそ

杜子
鶺杜國子
白芬子
盤齋
世我
そもきそ
園
二庵桐
東くろん
牡丹蕉ふ

志ゐ比句語集ニ
聞りてとるよりて
下陰つきとあり

甲斐
行駒乃
山賤
月の
つの
夏
庵鳴山
きりた
鳥
雨

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

根本寺於庫裏
湖水眺望
寺よりハ漕こゝろ
雲おろし人をこゝろ
船中より笠ハ
明なのわ廿七夜も三日の月

山矢座と菊の香や

菊の香や蝶
秋を隔て稚子も菓子の露
水畫讃
おのづから仏ぬしもうれしき

月白き浜を
霧の後雁を
花ハ乱れ柳ハ
心ゆるし貴ふ
ハゝ花ハ
兎も角も人乃歌あまた人老の
貞享三寅年
古畑や蕎麦

梅ゐる気味
古池や蛙飛こむ水の音
頓て餅こそ焼ル
山さくら瓜ゆでる迄ありにけり
諸集ニ発句ノ手と有
観音ゐ参ル農夫哉
発句なをせる
諸集ニ虔破ル之
入日やうきときとあり
破風より鳥の入ル夕哉
風瀑を銭おもし
ひまもなき小萩の中山ほととぎす
猶もまた吸ふ煙草の雨
夕顔ぬく花はちす下やきりぐす
蕎麦
稲つまも多き小道の秋風
朱陽うと人まつ小て角力哉
芋掘葉や月待里乃やま畠
深川ハ賀茂の中
米買よ壱の袋や松の中
芳友人勇亮
君火ともすき物ゐもせんもの雪
閑居ハ歳前也あり

洒の名ふりそふ夜ル
年ぬ帝隙事買ふ出ぬ
煤掃乃説前書の
煤掃やふ水行ぬ高舄
月雪とのさそりふし重ぬふ
貞享四年
嵐雪を送りける山居神を著ぬ
誰ぬふ姿ぬ水ぬ
よくふれ丸ぬ蕾ぬ花ぬさく頃ぬ
老情
蟬ぬも海苔ぬ老ぬ貴もて
ものきはも噪りふ雀ふる
原中や物ぬつく等ぬ雀
物皆自得
花ぬ遊ふ蚊なるそひてなる兎
鶯ぬ巣ぬ子ふ
庵の雪鐘ぬ止ぬ涙ふる

笈日記泊船も
亮を吸ふ有

翠を檜木やこゝの谷の老木のと
いへ侍るきのふを今と過す
明日をいかにまつ生前一杯
外為のくるしみに罣くく学言
そして殊勝の賢者外漫をう
さんひし片や衣のあるまゝのそちふ
ふ規ちきくゝ心そ叱ろうそし
其角う母五七日過美
外死も母ちき 如そすさはれ
然水事

發山文二
日ゝそ花そ春そ鳥そ
ちそそろ〳〵ふと書

雨打くなふるうき草苗代
病中有詠
鍬そ〳〵容顏蒼しそ丹雨
うか賣いろ〳〵人を除そん
夏よ閨くく前をつゝむ蛍の雷
河畔松陰家ゝ古き長凧
よ凧外をそ下た手弱の
發盃そ道そ茶そより春る家を
機面小うけるそ一句を発る村
娘り外衣そ小ゝの方卯之花

雪ありて　炭俵にも　一茎も
やどる色あり　と云ふ句
笠日記に　芦の花とあり

油煙にも　狂ひ一茎　雪の中

さゝ蟹の　さそひ上るや　清水より

蓑虫よ　きけ　ちゝよはゝよと庵

蚤虱　馬の尿する　枕もと

芭蕉　葉を　ならべたる　雨

名月や　池を　めぐりて　夜もすがら

義仲の　寝覚　果や　一夜酒　山吹　大

蚤　蓋乃雨

起よ　起よ　我友にせん　蝸牛

もつ　ともや　其　角　庵に　雪　ふり　ぬ

江戸を　出　て　旅人と　なり　ぬ　ふた　月

一尾根を　財布　に　つけ　て　更　衣

三河　乃　国　八　橋　の　古　跡　を　尋　ね　て

こを　見　よ　と　ばかり　杜　若

越人と　共　に　大　井川　を　越　す　時

笈日記に　格　雨　を
おもしろき　と　有

雨　雲　に　ともを　さそ　ふ　ほと　ゝぎす

峰　の　雲　海　の　雲　と　続　き　て

ゆく　ゆく　て　月　に　道　あり　雁　の　声

鳥　共　も　寝　入　て　居　る　か　鴨　の　声

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

京まで
嗅覚
嘆賞
濱
その
笠
時
闇
熱田
宮
陸
寝
鏡
清
雪の花
多度權現
鏡
乞人
名
南
伊吹
海
暮
鷹
渡
雪



鉄小文二免のまやと有

吟
鷹
雁
雁一ツ
あまり
鵜
風
雪
詠
鷹
杜
菴
雪の
笠
寝
家
雪
氣
雪

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

あこそ老ぬ心も老つゝ梅の花

山家

垂髪このむ音さへ梅乃さとの人

伊賀山家にうふとふ翁有土形

底ゟ取出て歌よみて石もあり

木もれ日さへ黒色よし冬あしたの雪有

そなのこ高く梁柳也こゝを考て曰

なるた石崖とも物ゆりいまゝ俤て

戎國よのこ燒ちらん以ぬめつゝし

雪に旬〳〵ふかき岡外梅乃香

發句文ヤ何そのうち

ゝれ芝やさ陽炎ゟ一二寸

阿波の産よ新大佛と云有比叡山

南都東尖まち更復奈上人ゟ

舊跡之旧友京七京等又人文を

さそひもよふしてこの地よりる仁王

門鏡樓ゟ詩を物ゟ多忠庵に

ゝれ寺牡物いとゝおぼつかなし磯

むら葦のくゝとゝいとゝもの海

筆亀に柳ゟ入ゟ蓮花

蛙狸ゟ生ゟハゟ芸の論を

鄒ぜり清佛を後人ちる岩露に
惜れるかつのまくさを敷ふきる
たのもしいまつくらもの〳〵 上人乃
清氣を崇免る為に
如意ころ徐よこらめ人乃力を
貴ころ上人の清願りつよ
侍るおやも世くく涙も高て物語も
きしむ物ゝ地石甘墓よめつまて
門人日のくに下るを馬の

志ゐさし免る
伺老る併つ礼と有

丈ちよ 伺老 高ころし 石乃上

上廿一

鄒ぜり

甘露ちよ森の中ちむ免ゐ花

伊勢ろて

神植やれなひもろ泥槃像

称植我肉ろ梅一本も尺ろる
ろと 景礼八老ろ 森ろ

昔ろ一本ろを
後に一本ろとら
清ろ子ゐつと 床しら免の森

祖代民部の息胡来よ歩めて

笈小文ニ雲老た
ゐりてと有

梅ぬすむ狐もうとき夜の花

笈小文ニ出山の寺有

山寺や出てしさいそ夏木立

翁提山

笈小文ニ苔庵ニ会と有

楠遠

盃に波もうつるや夏木立

二葉軒

笈小文ニ芦の葉葺と有

蕨折門をむすぶや葉の枯葉

龍尚舎

伊賀上野蕉門俳諧ある初会



初さくら折しも今日の雨もよき

笑ふ人ゝも梅の中より

景清も花見の座敷や夜興行

探丸

さゝ波のひろふたやどり古きを

おりの出情

様くの思ひ出すさくら哉

飄竹庵に猿を入る

猿を聞人捨子に秋の風いかに

猿を留よそも子ぞ秋の暮

梅ちるあと
山ぶきの
花ざかり
笠ぬぎうたん
芳野にて
さまざまの
事おもひ出て
初瀬まで
裏町筋や
筏士
腸
雲雀より
空にやすむ
鳥の
籠の内
海のうらうら
霞む日に
桜うつきとくや
扇まで
酒もむ
よし野まで
花さそう
山も見よ
去来
去来
苔清水
凍て筆を
取て
西行
西河
おろおろや
山吹さく
蘆の
音

中文庫に栖去の辞
前書ありし
伯船上よる者

笈小文に
我門の花や上方先生
などとあり

三つの名
尾花の品主等
多き事
清水に
筆を洗ひ
清水に
笈小文に木下につく
事

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

丹波市と云ふ所を過るに
そま人多く藤かづらを
苧にかもうとて
草庵に
花の陰謡にくるふ
かつら男山乃麓を通る四方の
急さのうるはしく嵐しも爰やうらやの
嗚のかしきいと艶なるに此神の
尽のもあるらん哀人乃名さへ
以後伝ん
羽尽くし花よ時ゆく神乃秋
高野
父母乃未きりにこひし雉子の聲
行春や鳥啼魚の目は泪
筑紫
一ツ脫てうしろにおもし衣更
ふらふらて蘆火をもかくる
戻日におもたくなりぬ衣更
灌佛の日は生れ給ふ蘆乃水
衣来ても単一ツ着乃一ツ着る

招提ちる花鑓水尚の清影をあし
清見が関を思ひつゝけて
寺籠りて後見ぬ恋や猶あはれ
笈小文 須广にて
須广までに築ぬ 笛きく木下闇
きそおとろふ魚を釣て生涯の句乃
与まゆみしらしら鳥の浅羽にて
つのくにもるもみてうじ、ゆずりおとさそ
海士がもさともくさもしら我
傷乃名跡をそ免るゝ海士をそ
きまもるといふ死ぬらく狩むろしの

笈小文
月をあるじとゆるこゝろ
やまもともも青

寒いきやうに
須磨の蜑が矢先なる事也 鄙
漁人乃家ちうき 荻ふの糸
おもてくにたゝるさゝ
海士が家やもし忠花
月をたゞでも物まいまも須广の夏
出憊そひやうたんとい海も哀の蚊
蝸牛角ぬりわけよ須广あらし
明石夜泊
蛸壺や はかなき夢を見る跡の月

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

時雨亭好
大切なる或人のもとゝする
葛子庵ゝ休も
山崎宗鑑
宗鑑ゟまくらをくれないのつゝ
と遊しゝる古ゝ哉
うちよふ
有ゝ
俗士ゟ
をゝる五ゟゝ



発句集ゟ
ゟゟ嵐も春の雨と者

発句あれ
五月雨ゟ
木曾
ゟゟ
此
尾州笠寺奉納
笠寺や
お子ゟ
ゟまく人
今ゟ

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

稲葉山

捵鮎もいくやうち重ぬ夜の寒

後悟のぬしおもひをいてゝ

ちゐり給ふをきゝえん花も夜地ル

も誘き人に逢ぬ宣白ぬきおゝ庵にて

秋芳軒翁

後日記ニ高務の集ニもきゝ及ぶてと有

稲葉山の杉の下涼そて長遠乃

秋をちこさもむなし

山陰や分をなしきえん婦り畑

きたるらし也の川乃鮎もます

長良川

まて十八楼の記あり

後日記ニ目ニ入る物ニ

此下ニ史記ニ賀治氏ニ所

鵜飼を見て

役に伯夷と云事

おもしろうてやがて哀しき鵜舟か

岐阜山

悲あふしや古井の清水共尚人

乗門已而亭に日ころありて

別よりやん桑の秋手染る白き事

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

杉苔水禽
栗穂ながしくもあり
大雪根成就
何事ありてや三日の月
ひろひ
ふる人と庵あるじと
うそもまことも
鉢たゝき
鉢たゝき
笈日記にこゝに
ひろくと有
笈日記に本芳の蝿とも有
笛別
送られつ送りつもてや本曾の秋



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

桟やいのちをつなむ蔦かつら
月影あるしに酒をもとむ
盃特出より都の人をもてなす
てもあるもぬかりを恥る異もけぬ
無人寺晴碇玉壺乃心せり
多くも一夜の名月
何方中に薄く狩書さし指の月
山をいかに
南は西南よ
おくにもかゝる

やあれ梅の実山のまうと
おくさ免ぐるもとといひきんもおとうりに
老ぬそそ誘ふ出しまふ何ぶ
まの老る人を捨てん里の手
ゆかしく涙こ蕎そひれ
伊せ焼ひやりちく月お友
善光寺
月影や四門四宗も一ツ
十六夜もさる文狩の翌れ
方まうて大松のうし秋お九

木曾於義うき世のくもりし菜の志
須そそも石を浅間於能公雷
花物亨
丈ゆく咲け九日もちりし菜の志
中秋の月を更科姨捨山
おくさ免ぐるもとといひきんもおとうりに
老ぬそそ誘ふ出しまふ何ぶ
木曾の痩せも真っ酒に後の月
素堂亭
蓮池の文台お引ま菊を堂

きのふを龍山のそなた酒のあるじをまねきて
牧嶺をそふれと年誰うきこゝろのたとへ
いさゝかも乃ゐ水うつす影や秋を名くしの雫
畫讃
西行のうちもうら札杉形露
り秋や身をふきまふ布庵園
柏枝に烏のとまりたる秋の暮

旨文の間よあ水う神乃高を栄少
ちまゆまひ春う兒ゝ越人を送る
二人乃ゝ雪をこゝろしも降るう
清泉籬や池のやう風流なる外
雪ちゝ御や春乃うら鉄ゝ
大通菴ゝ道園居士芳名を
きくる久し初やたゝかう心ゝ
契りてふみそ新日をまゝ初契
一夜の雪と清ぬりみすをなや
あ御とうを閉ゝ

泊船信漂泊を通りそゝ者志ゝ二回
信濃路ゝ先の旅行
ちし探もちう

元祿二己歲

元日に田ゟやゝ秋日こそ嬉しけれ
春雨や蓬をのゝ道
此筋よ吹て蕎麥さく花や鴨の聲
牽さんや蕎麥さく花や鴨の聲
落山松柏まで
陽炎や家有にたゞ有り顏なれ

笈小文にハ行人の
志ゟもそし免をゆ
りんと有しと

いさゝらゝ雪見よころふ歌仙哉
炭賣のうつゝ冰るや嵐ゟ
埋火もきゆや囘禄の高砂
旅人ゟあふ夜も月の更行
鶯よまだ巢箱ゟ外へ

酒のミ居る人の猶よ

月花もなくて酒のむひるの事

茅菴に梅咲かゝり門人ゟ其角

嵐雪来

去ル年梅と桜や茅乃餘

山家

鞘の巣ふきしおれの桜哉

留別

鮎ゟ子乃白魚迄ゟ名ゟ知

住ゟ方を人ゟ薄ゟ杉風ゟ蟄





ようつ房

茶の戸も住ゟ侘所ゟ哥仙迄

ゟ名ゟ所ゟそ船を来ゟ前途

三ゟ里乃里ひ駒ゟ音ゟ聞ゟ

行春や ゟ鳥啼 魚乃目ゟ泪

室八嶋

糸遊ゟ むすひ ゟつき ゟ哥ゟ有ゟ

日光山ゟて ゟ葉ゟ葉乃日ゟ光

おゝたゝゟゟ ゟ滝乃うゟおゟて



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

碧付き滝に
雨降れバこゝ秋吉角と云ふ所
旅まくらやたゝき打つ砧の音
百姓の屋ふ人を枝折の夜明る
修験光明寺にて行者堂を拝む
夏山よ足駄を拝む首途哉
雲岸寺の奥に佛頂和尚乃山居の
跡あり石上の小庵岩窟よもぎふかる
木啄も庵はやぶらず夏木立
那須の温泉大明神乃相殿に
八幡宮を勧しまりて西神ニ
鉾ね納ふ
湯を結ふちうひも打ちし岩清水
殺生石をそ乃毒気
やうひも啄木の鳴ひゞき
色のくぬぎ林
石ぬ香や夏草赤く露暑し
秋鶏も人の住景よ哉
山も庭もうこき入るや夏生安
鍛代も馬よて通る此日付乃

おのこ短冊ほそ筆をとゝのふやうにし也

ゑをなげうつもおもしろし

暁を惜む馬盥哉　　鄙ち

清水流るゝ此柳をしばる也一歌の那智

ありて田ゟ田ゟ哉

戸部某のこゝろ柳をおくる

の餞ひ聞えけるをいつくの柳ぞやと

男ありしをゝこゝろ

田一枚植て立去る柳哉　　ち

奥州今の白河よ多賀

早苗も我色黒き日数哉

西ゟ東ゟ行月まで風の音

関守の宿を水鶏に問ふ哉

須賀川の駅にて等窮とふもの

尋ね来つ白川乃関いふこゝろ

やゝ問ふて

凡流のそゝろおくの田植うた

此句乃傍よ大きる栗の木陰を

ものして世をいとふ僧あり可仲とふ

世の人ゝ凡付ぬ花も紅葉乃栗

言丸ゟ人ゝ歌や目ゟ

妻花を折の栗とも有

初茶 素 四リ
志のふ秋里
早苗
俤藤荘司
太刀無
笈も太刀も五月
ミ秋八笠嶋の道祖神
五月雨
俤ハ
笠嶋
五月



我隠の杉
ヤ九て昔
挙白
遥拝と
獨り杉
仙蔓
嘉右衛門
茶鞋
あや免
杉盃

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

鳴くや　みちにさきつる夏柳

　　高館

夏草や　兵どもが　夢のあと

　　光堂

七宝荘厳の　雫かな

　　風の中の

五月雨の　降のこしてや　光堂

　　音風雨かとよしの山中み迫堂を

蚤虱　馬の尿する　枕もと

　　尾花澤清風亭

涼しさを　我宿にして　泳ぐ魚

遠浦よ　うのはやう下りひむの聲

よりそひを　俤にせん　冬の鳥

　　立石寺

閑さや　岩にしみ入　蝉の声

　　雲晴れて涼しと書る

五月雨を　あつめて早し　最上川

風の香も　南に近し　もがみ川

　　新庄風流亭興行

暑き日を　海にいれたり　最上川

水の奥　氷室尋ん　柳かげ

　　羽黒山より湯殿山へ越る會覚阿闍梨の坊

雲の峰　幾つ崩て　月の山

　　懸の樋こや夏ふかき南谷

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

別院を舎して

有雉や雪をいとふて

きゝしさやかのこゑ

湯屋にぬるゝ袂うれし

湯屋にて月北山

雪のうち

雪丸廿二年ごしらやう

海を入るゝと有

暑き日を海に入れたり扇の風

酒田にて

酒田の湊涼意庵ふたつ有

あつみ山也吹浦かけて

暑き日を海に入れたり扇の風

雪丸廿二海士ゝ書と有

花ちる夜一度に仏おさうれ

不卜一周忌追善

雛ちる雫や一つ一つ

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴さへぬれて海すゞし

お劔さま

花のやどよやれし桜ぞ光木

西行法師の記念をのこす

夕ちるや櫻を惜むこゝろの花

越後の出雲崎にて

依渡る鴈に波上十八里とちり

初秋のうそを霧ともあくた流れに

波も高うそうさ孔雀の上乃

めよ見わるさ

荒海や佐渡によこふ天の河

文月や六日も昔の夜ゝを恥る

高田勢はた細川春庵まて

雲丸竹二葉園ゟ

薬猟にいらるゝ

枕引よもそ花を多枕

多き女の春二人寿ときこゆる

男共春も変る物語を味ひ

越後の曲新潟と云所乃遊廓

伊勢参宮をおもひたゝまりて

送りて笠もおもひ立ぬ

むつのうま言伝もしやるまり

一家ゟ遊女も寝ぬ春と月

加賀北國ゟ入

ゟ也の雪や入口を乃礒海

一笑とゝもゟ出立ふるゝ春の

なのく南ゝにも年の矛盛

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104

ガラス使用

志ゝうとてその兄追善を催ス
墳も動け秋風の歌
この秋は何で泣ク
蓑虫の音を聞に来よ
蓑虫の音を聞に来よ
蓑虫の音を聞に来よ

植ゑ〳〵て雑勝の土地ちを
石山の石より白し秋の風
山中乃温泉
山中や菊ちまおりぬ湯のまひ
桃夭
桃の木乃その葉ちも乳粥乃気
悼遠流天看法仰
そ乃玉を双運ぶこの世法の月
夢ごちにおるちとちを
今日よりや書付消ん笠の露



令昌寺にて漆黒の文ちく書下
下るを僧ちも残惜を
初蝉庭乃松のちり〳〵
庭掃て出ばや寺ご箒木乃蔭
渺水の捨をや庭俗にあきの
清水乃硝子乃盃ちあらて一ト
あさむつの書る事そ
あさむつや月見の猿乃捨ちれ
月のこう雨にお供もちり〳〵
月見せよ玉江の芦を一夜乃先



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

煙の山

義仲乃寝覚の山乃月出し

金澤の北枝と云ものおくり送りて

此所まで志ゐて今夜ばかりにて

物書て扇引さく余波哉の事

湯尾峠

月よ名を包みてやいもの神

古郷や臍の緒に泣としの暮

門よ入と蘓鉄が弟のまひ

向ふまで見送りつまを待さまう乳

泊船堂と蘓鉄の包んだ事

筆比の明神よ夜参ま代参遊行

二世の上人ろうの土石を負ひ泥

清をうばの世で系語従来の灯

古郷今よ魚て神前に生砂を

奇し跡不是を遊行の砂ト伝る

月清し遊行のもてる砂の上

名乃や北国日和さる気まき

錢ら時まて

月ちこ錢ま持ちりめ海の夜

後の濱よ遊ふ

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

寂しさや須磨の濱の秋
浪の間や小貝にまじる萩の露
　　惣七
龍尾舞木枯実を吹や
木母寺
うき我家や身を置所
如行
痩なつかりなき葉ずつる
鈴岩亭戸をひらけて雨の山
伊吹ともえもよもぎも
雪ふる孤山の
それきに月もさやかなり
猶の物うきもいやさやかなり
六月や伊勢に近き
蛤乃ふたみにわかれ行秋
内宮外宮とおがまりて
辻番ありて
たうとさにうたれ
宇治の中村と申
秋風や伊勢に

又ふる雪よそれ待ちそのの
書男のかたひらもまた
やたゞれたうの日向もの書
髪をそりと庵ふりもれし
ふも今更にや歩うす書みそれ

競集百まひてふも首

月さひよ明智うす書みそれ
知足の弟童奪つう新実を賀也
よきふ家や雀よろこふ背戸の栗
筆の家高し拾へふめりそれ

遊女畫讃

枝ふりみはよくうす御芙蓉か
蜻蛉やとり付そうし石の上
茸狩やあふなひ事もふまし
七川しそ花筏も小筥をかしらう
いつく時雨笠をふ於ふ傘

茅菴

人くをしれよ名をくとも
ある庵そ
冬庭や月さいとう御虫の吟
山中ふ井と遊そ

初雪に兎の跡も乃松哉

いさみともなくころびつゝ犬

亀屋形にて兎の跡ありしと　亀屋形ぬれの古びや冬ごもり

花枯にきうるまもなつやいり大佛みね立て

層洒来湖水の磯を這出ル

田際芦間乃龜みてさゝを笹小屋

牛見馬見跡のぬくもり冬〳〵龍

疑使津や田螺の殻も冬ごもる

未なくうれ居る人をちらさ勿

先祝ひ梅を心乃冬ごもり

自畫自讃

いうめした音やも數珠掛木筆

長嘴の蔓も欲き鉢叩

膳所義仲庵を人〳〵訪ふ

憂セよ囲代ゟ氷魚煮て出さん

何よこの沖走恵命行くらせ

元禄三年歳

都ちき江よ年をうて
薦を着て誰人いまそ花の春
神路山を出るとて西行の涙を
まづ拾ふ曾賀の信を当しむ
何の木乃花ともしらぬ匂ひ哉
躬をもしきしたのあるじの前
二見の圖を新に修りて
うつの如くうしなひ花し浦の妻
墨ぬり家にて
俊簾の奥より拭ふ北の梅

砌ふ事
勿れのぬるともおもはん雨の花
うらひを秋笠庵にしる梅の前
陽炎や紫胡の原乃雪とまり
当園花植ゑ置ける庵をそめくに素
ら乃八重桜の散よ隙なく
いひ俤く仏ゑ
一里をも見ぬ花さめる除夜や
州合らや高彩急に桜哉
我茅や花のさうを賣あるく

蘇東橋木ふるまて

土手の松　花やゝ木ぬのき殿作り

木白無行

畠うつ音やあしの乃桜あさ

雲雀啼中の松や雉子の声

蛇くふ迄咲そろしきのこ〳〵

木のもとも汁も鱠もさくら哉

出羽圖子呂丸をいざなふて

死せる人ありけり

常帰らずあり〳〵と書付侍る

其の筆をとゞめんとふるさとの雨

瀬田乃蛍見

おもしろや尺や船路の蛍狩

石山のおくゆかしとふ夏人形

捨る庵あり幻住庵と云

閑寂住慶いと目出し花盧に

ちる作者の名月のそら更行て

先いのむ椎形木もあり夏木立

幻住庵と龍ゐるところ

夕見あらはすつゝすめりけり花

日の道や葵うひまぬく五月雨

膳所へ行人よ

憲乃まつり足すゝめよ瀬田のわた

忘れ、き今前書、
四月廿七日とぎり

秋乃きて幾事迅速

やこのて死ぬるしきをこえて蝉の声

大津筵亭宅

散る花のさゝしの荻祢ぬる豊岡小

今歟の木ぬ葉こしもいと果の影

木曾墳中菴暮雨近し

竈まつりふもと焼場祢ぐらの雨

木曾墳の春を

祢人くる苔ふみ分て敲戸

苔の戸を志れや穂蓼に庵さく

桐祢木に鶏等ある塀の内

幾のこや猶まりて身を

皇田よて

病雁乃夜寒を高て落ぬ

蚤の虱も小河走にするいとゞ

湖祢素門亭休自の像やあん

祢ぐらの方にあぬるはなを

画さんと讃せよとや其通
六十余州名所も見ん 君と
ともよ憂牛すもとて 夢の形を
是にくらふる屋をかりてす
こちむけ我もさびしき秋の入
旧里や道もその
村雨や田のあら株乃雲むら
きりくすや小雪に鳴る雷
木ずえや頬をれいろむ人の新
大津にて

三尺の山もあらし秋の入
洛陽雪を尚高嶺丸無行
半日を神を友まやとしかれ
いかくと人よ言れても形鳴ん
猪のやうな武家更き屋心を使て
役つゝ猪のこゝろや道巨燵
旅行
そつ雪や聖小僧の笈も色
為ま世を志のしる
雪の後をてしまの火箱う

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

果の報日ゝ新ゝ
帝重ね乃事ゝ
のゝゝ
行脚のゝ器一ゝ
ゝ
こゝゝ世ゝ媒ゝ
木のゝ吉乃誰人ゝ
祝ゝ老の後志賀の里ゝ
住しゝ也いよゝ
ゝ老尼のゝに

くゝり
か猶乃おゝ
湘水眺更
比良ゝ上雪
う鮭も空也の
ゝ
京都を立出
春をゝて
人ゝ家をゝ

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

元禄四未年

湖水の雪名菴よもちむふ村
三日月を関と題心月雪

小文庫に筆のたしめもと有

大津絵の筆すさび
乞ふる江戸へ趣くね

梅や菜やりこの谷の少しろる汁
山里を客嵐しく色の衣
草袋亭月待
月待や梅うち待て行小山姉し

雑集ニよせ等ニ有

里のこ等梅折のこせ 牛ゐ報
田家よりて二句
麦免しにやり係、寒う猫の書
こおろぎ影雨や二葉乃若ふ
未云まて有人よ列る

笈小文ニ同前書そ
森の角より一ぬし北
ゐれぶと有

珠頂ゝ洒落の記ありて
四方より花吹入水や 湖乃ふと
春の秋を猫よ
万年別墅

年くれさまもこゝ中を夜のうち

尾張の人より清風一将木曽より猶洗

茶一袋送りこされを門人にひろむるとて

歓ぶて夜もよきん　二升樽

赤坂の庵よて

ふせさや　うき起さるし事ぬ雨

山吹や笠ぬさまさまを屋地枝の形

畫讃

ねや如文や字法ぬ焼焼の白ぬ附

崔子や素等うぬて　氣ぬ菓

湖水惜春

行春をあふさの人とおしむ湖

春よても春うつくしや神鳥

結鳥三文の松本ぬ
ぬまを下駄成者とも有

あをうてて木立の竜ぬる文の月

嶋崎よて

諸集ニ大坪系とあり
坪陸日記ニも
大坪救と有

ふ　規大坪ぬ義をも法月夜

小春ぬ麦うまぬしや山箕のさりぬ風ぬまし

うきぬしや仲ぬるとぬる人の果

治郎三男の郎ニ載
陸奥そうニ先の郎ニ
載しう

関北夜や第をぬて峰ぬ雪

たものみや雅き何乃孫のそさゝ

或寺にひとり居て

うき秋をまつ〳〵せよかんこ鳥

雑集に むうしを
志のふしき有

同へけうもり
泊船集に有

笈の小文

猶子

猶集に麦の穂を有

麦の穂や穂先の海に落る雫

秋ふかきまつ〳〵我もまやしく

元成像鐵肝石心共人之情

猶子を有う

破て屋人拾ふ笑顔石の上

小文庫に小さきを
誌之ありう有

めう柏を牧のおさきも見ゆ

丈山乃像に得

ふうなほ〳〵磯を猿もつくろいも

水雲身をぬく〳〵病やつれ暑の雨

井狩民ゆ橋

北遊に要むしき有

世の変や潮干の蛍や花のやど

こゝろを右とひだりをまことて有夜乃

四條の河原にて

ころより香炉峰の雪を
庵をうつし夜をこめて
遊ぶ女も童もおむもひ色いのめしく
男をも識ちうる事なし
老人せよはしりて桶をうちやの茅ぬ
いと面白き物さもの
氷乃ごとき
川風や奢る夕もそ
女間を馬うて
太夫う家名を称う



ひうくとあうら
蓮のうき
湖仙亭
此船を水
海乃亭
ちゝ泊や
湖や景を
曲峯よ廻て
飯おふく
とつ秋や


国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

盆ごと青苔
胡蝶ももうて
秋風の吹
宝古銘人の類
毛ぶかいへた唇さ
朱鄰包よ牧のも
畫讃
白露もこぼさぬ萩の枝
霧雨ぬ空を芙蓉哉
或智識の曰ふ
とうやいと者
るつたちそ
栗津ま
稲つま海
西東南
月代や篠よ
古寺歌月
名月や生に
北義仲菴
三井も乃門
志水に湖水北名月
もし矢を名月や見
るふもの板名月や
海に向へ七小町と
よろよろと氏ぬるよ
夕影の筋に月ぬる
生る義しき歌ぬし者

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

名月や二ツ有ても瀬田の月
第三添、あるじよりの句
雲井の雁も引とゞめよ
舟を曳留て浦よりも
鐙の音も月もさし入よ須磨の夜
なよひや海老の取ものゝ
配もくしや蚊屋
曲翠亭
乳臭の下焼立や夜寒の事
猫まゝ兎角木畑や迎鼠

お寺を過るよ
森北能や
むくりきけちらし
猪引き猪の
鷲の目も今
鬼灯を実も
栗の菴
も世よ北
成多を東山と仕る僧を
西行のよし

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

山寺集よ載しかういふ俳仁
やとまつそれ坊のうしろ
栗北戸乃月やそれの俳諧
九自ねるこおうつ杯をまつさく
寿ふ九八
名ゐ戸や日ふくれし夢此風
尺取の虫九や此ふ乃後の栗
田家よりて
指さす姥も冬ごもり菊の花
大門通をふさぐそ

琴箱やたゝりふる庵乃智恵の栗
皆田の何某未改醫師ゐ兄乃亭に
まつ九てふつのう栗をそ酒を
りてるふふ
蕭条の鶏ふる蜘蛛の巣い珠ゐ中ゟ
諸集ゟ除のさくや
もも有
蝶も来ゟ飛をさそふ菊の影ふ九
同梅瀬可伏亭
祖父を親をゐ子をゐ庭も掃こん
秀秋の栗をを
忘形ゐしのを桐こく
秋の九ふりや蔦の紅葉有
秋九や桐ふ

泊船ニ菊ゐの漢ゟ
前書してゐふしき
破ふるゟ有

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

石山よ語らん道
梅柳如去のふた春
旅寐長秋
丸窓超ても月の名残哉
月の澤と聞る明照寺に松の
山を洗して
ふるふるや海そもる春
同寺傳奉加の初畫を四休物
奢よ土石老らと染本を物
硯膳に急く侘れと

百歳ちりぢりきを庭の春
畫の氣乃れりて又をうそ氣味雪
美濃勢を
木うしにまひやつかし帰り花
千川亭
折くる侘吹をてやみより
菜の後大根ぬ
防川亭
梅を探る梅に
熱田梅人亭 廣氣乃蘭を

泊船に探梅と前書
おく笈小文に在之

松ひゞき
水仙や白き障子の
とかすまる白きと
二人手枕先
まくらへて
そゞろなひ寒
同執墨の家中
京に飽き也こゝろ
いつ人の唐代と
みふとて妙る関
吟じうしこ美濃にて
梅柳早咲
風来まふ糸
木ずゑに岩吹
鳴田の訳塚
石うりて名をなのる
馬ふみ志ら
蚤身をもる
赫出て
陸奥にて
と書給ふ
雨
雨
雨

三秋を経て音葉を庵に帰れバ旧友
門人ハしにむらひ来りていふを
ふしぎそうに侍る
空もうくもりてや雪の狗尾花
追風日ごろよろこぶ者
峯まさむ鳥も雪の餌うの声
夢ひを驚破甕よ猪着せよ
小町画讃
老さやそ雪幾度日も築中笠
仙化ノ父の追善
油炸魚ふれて竈しこみ祢うさ

旅行
煤掃き杉の木肌の白さ哉
素堂亭元会
寄雪中庵の元有魚鳥乃心を考へやしまん
元禄五申年
多くの猿よ蓑を着せ猫の声
蓑蘿よ猫ふを着せ何の菜ぶ

あもやいろしきうらひまや梅めろしろ森の前
等や餞よ雲や梅めろ先
うそへ事ぬ友しの梅めろ
猫の恋やむ時閨の朧月
題しらず
お雪折時雪やせぬく妻の客
おとろへや歯よ咳あてし海苔め
蜆子圖讃
白魚や黒き目をあく洗ひ猶
起よくわり女ん
西行上人像賛
もてそそく月をなきり秋と思へとも
雪の降日もさふこそあれ花の後
日もうれしき花の枝
時鳥啼や五尺のあやめ草
錦貪をせて出んかし鰹
五月雨や壁つらふ素めろ
ゆふ影や破て窓の元
ふも等よ昼顔咲ぬん

諸集未むしろ有

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

雪の渕明をうつみむ

忘れ草に春秋をこそ忘れ草やそしる人の有しをそ
院集に並やと有

忘形に春秋をこそ忘れ草
素堂の母七十余りなんとの秋
七月七日におよぶ物忘るる萱草を
筵をりて題とす

水無月や翅を欠ける秋
七株ばかりの萩のこぼれ花乃ころ
多いろくれのくる夏
書くても有へきりもなし
この末を庭一ぱいの秋

音月は地を潤すり夢裏の花
名月や門さしこむも遠からす
萩を折風折風を割り仮屋
曽良翁水を物乗をかもなる
明月のそなたもなる芭蕉哉
を植る

芭蕉葉を破ん庵の月
杜若咲ふみ分る 雪の形
もち草やさる日暮つへき秋の雨
行秋乃形多のもしや蓑柑

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

ふとん人も　年ゆれ初雨
塩鯛の歯ぐきも寒し魚の棚
皮衣身ロ切よ　撮み所
燵ひとまや花皮衣　老ゆく鷺の雪
涼川大橋ゆりこす　橋もろへ
初雪や掛うりの乳やしぼ
同穴成ル共や　庭をつつうし地
青ざめやいろひて踏　梅の雪
歩まて　花入探れむ　免梅



雪ごもに梁多九む　住居う就
月氷乃夏ふる　針立人寒み入
葱白く洗ひ上ぶ　ぬさ礼
殊更き　音走くやて鉢まる地
せめて礼ふ多ちまれる　様嫌ふ
蛤ふいろ甲斐あれやしみれ

元禄六酉年

人も見ぬ　春や鏡乃うらの梅

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

ちゝ来のすゝ人形ぞする

ゐ老をそゝろ

茫蕩のさゝ味もまてし梅の花

二月吉日ゐて是橋ゝ列数入

醫門を賀す

神むやた狐のそまし叱ゐ礼

蕭山乃ゐて勉まて探ゐ画ゐる

琴の讃ふ

ちゝ花や香ゐ礼とろく琴ゐ塵

傳ゐ吟鉢別

鶴の毛乃とろき元や花ゐ雪

露沾そよ餞ふ二句

西行乃庵も有ん哥の庭

森川許六

雉の花乃心ま小よ不雪ゐ松

うき人ゐ招ま小ん本乃の鍵

露沾そよ伝る

五月雨に鳴の海菜をそよ行ん

川中ゐ狐ま小よふまゝの雷

ちゝそゝさし小ゐ上の鮫ゐ物

文月ちの花火をうち
浪銀河砂浜をひさして鳥鷲も
物杭をちのしの一葉猿をおしき
二星も色形をうしろめ〳〵ト町の
歌を題とう
鳥水よ星も物のや岩めく

名関の乾あ
舞や雪を鎖おろを門の傾
急うなや是も
吉集うをとう伝歌の記行書て



送うるそ砂奥を書分る
西東おいれを同し秋の風
先の名乃者も考て四十雀
枝折実ちる猿のねきや多摩川
畫讃
鶏卵や雁形ちおきる附形あのし
浪川のをちを舟をちを杉とう
野よ舟さし
川よとこ砂川下や月の夜
小名木澤乃桐葉無行

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

秋をそふてりも
[illegible]いさよふもの
嵐蘭を悼
あき水の手わて出し紀来の牧
同蓼を指て
尼やそれ七日を蓼の雪折
東順老人を
雫よ硯をうばふ柳よる雪
八月乃あやめ
鴛水亭
[illegible]
[illegible]
小町堀まで
き久の花 咲や石亀乃石の間
危難うちやうの心をよむる山家
集乃返よまふ
一家もこかさぬ蓼刈う那
[illegible]陽の高を
俤ありまそ
[illegible]陽とりくるんよう

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

やゝあつくなりまさるあるじを
秋葉を詠して
菜の畠や庭よき程の屋敷
陳臭さうさうの世てう有
鍋つなに小坊主引
娘り賣妙百あまひて講
壹菜や杉籬のうら伺ふさ
曲水格魚を容乃新仕
埋火や壁ぬくし鴨の足
驚につゝまる物乃葱を喰ふ
当座ふ格魚を菜粮を喰ふ

武士の方祀まのき寒の井
雑水ふ製芭きく新乃霧ふ
冬ふ九の磯よふ魚乃来ふ
初雪や水仙ふ葉乃まふも
仏の讃
もえてもゆきまり仏ふ
芳焼や孫輪の田井乃初氷
瓶破ふ夜ふ氷の寝ふ
きゝ掃ふ己ふ柄つる大工ふ鉋
有明もとゝのほちふし鉋ふ音

※文庫にさる物と有
※墨塗之字許之考
等もさる物と読りそ

お別の底きくきくのそれ

元禄七戌年

蓬莱と園たや伊勢の初夜

一と物に一度つゝ菜小
梅ゝよのつゝと日数ある山路ゝ

寒雨や簑吹うくも川梅

ばゝ物子梅のさゝいゝ家さゝへうる

いく丸間空て雨降ぬ雪紅

傘下抑ゝ尺よ梅の雫

春雨の泥よ考ゝる漸ゝふ

春雨や蛤ゝ第つゝふゝゝの偏

彩よ州ゝ農ゝも出よ初梅

句空への文よ

うゝやゝし深世ゝ北乃山さゝゝを

元禄の深川ゝ梅拿ゝふ

花尺ゝゝさゝ舟

筆紙ゝ書潰ゝ

物かしや袋の中乃月と亦

探る花と夜の
寺の多き心よ
花よ夜ぬこれも春らひろ嵐の菜
山吹や夜入よりうるに人く
春うちさびきの音ふうみ夢
さまし物像の水仙を多のう
世ツ五器の椀ツぬ花見ころ乱
灌仏や鮫を今まる数珠数当
木ううれて茶摘もきくや 鄙う
鳥城賣の春おまらいし 物鳥

志ひたい色と
江梨ちとすしうと

うり花や うう花 物乃ふこし
紫陽花や 蠶を小庵の別世
鴛鴦新雪自画讃
竈ぬ 蠶や 牡丹乃花の蠶
四度もそひうう 依川乃庵を
玉出うて
ううひすや 此のう蠶る光を帚
五月十日 表 庵を出て友を訪ふ
川崎まて人く 送りまりて幾の
今をりそうへし

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

麥の穂を力つるも力ち花ふ

五月三十日ぬ富士の男山出たる

月よ〻添ぬ〻や雪を更ぬ〻富士

阪河迄ぬ〻や花ぬ〻橋も茶ぬおひ

道芝よ〻ぬ〻ぬ〻ひて

やん〻ぬ〻ぬふちや雨乃花ぬ〻里

大井川水出て跡田塚ぬ〻う

ぬ〻にぬりてこ〻ぬ〻

五月雨の〻や吹高せ大井川

苣をぬ〻麦ぬ〻ぬ〻や若ぬ汁



夏ぬ月傳油よりも出る赤坂う

尾張まで着て二日代ぬ〻

世を捨よ代ぬ〻く小田乃行戻り

霞川うやもうぬ〻伏ぬ〻ぬ〻道

遥ぬ〻ぬ〻ぬ〻に富士山田氏ぬ〻

うぬ〻ぬ

水鶏ぬ〻と人ぬ〻いへや伏ぬ〻

世ぬ閑居を里ぬ〻ぬ〻



ぬ〻しぬ〻ぬ〻指圖に見ぬ〻

義湊ぬ〻ぬ〻ぬ〻ぬ〻



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104　ガラス使用

音信や
盥影に昼寝せうりの床の山
荒田民よ遷之字
紫付し馬の戻りや田植柄
更芝ヶ庭に杜を植そへて
涼しさや真ん中栗ヶ野も整て
志ゐをしめす瓜の土
と書詰集古葉瓜と書
影霧ふよこ木てまもし瓜於泥
梅赤里作育ましまし御生瓜
小倉山常寂まよる

杜杉をお免てや風於のる書
六角中納言
世明亭
すゞしさを殊よふつしり嶺峡の朴
清流や浪にちりこむ青杉葉
嘉永七寅之年大井川
信よりおくし夜の句書
夕涼よ子孫
之道に苦しめて
ゎれも物をニツよかる歌生業瓜
人くつよもて瓜の名所多
りひ出る中に



国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

うき秋ながむる日光傳代高き事
大垣の城を
旅ふた庵結ぶ徒も岡田日某を送る
簑の雫 袴も
曲翠亭
夏秋夜や窓もれてゐるしひやし物
大津木節亭
秋ちかき心のうつりやすからん
茅菴二句
色知しそめふるより吾乃花の露

ひやしくと雪を炉の名人亭 盡有
ちゝ多や秋をさきむる萩すゝき
大津より帰りしを見の許より消
息をくれ又四里ほ帰りて急
舎をいとなむ
家をうれ牧と白髪乃寒糸り
尼寿貞うた
あるゝ女子とも乱黒びそむまも
かゝ間を馬うた亀に鈴音もれ
笛鼓をこの夜能する所を

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

画て奇巌の陰より掛らむことに
せ前の韻錵を松とし遊よおとろく人や
うつゝをやくさも来てさのせ前を
ふさるりありり
鞠つまや新の取うすいきの種
いつ書や閑方行五信玄撃
藤市当席るの庭乃まる砂り
ふるを見る
外色やおとろよ植し庭の森

猪乃床もふるやきりくせ
めよこの家雪やおはしのまう鳥
名月の花とくする砂まる事
名月に禁秋霧や田乃もも里
七重九九芳野、月も十六里
仮勢の斗従よ山家をと水る
夢まゝまゝ花てもとちまる山姥九
松茸や考ぬ木の魚乃へりつ市
行処や翠雲光て
里ふり多物の志りも家をれし

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

行秋や雨をいとふ家のいる

南都より

菫の香や古き佛迄

我名乗る梅香や素良も笠代の男

ひいと啼風寒し夜の雁

園城より

菓子香に子うの里秀衡高白山

也玉逸すも男

菊に出す素良と雑俵も香身夜

仮寝の夢より立つる



朱買てゐるお、この九份月見哉

事庸亭二句

秋の影をうち崇しる 影こゝろ

れもしろた秋の影夜や雪るふり

園女家より

白菫の月ゟ立る塵ゟ哉

猿蓑

也秋を待て年ゟ鳥

芝松哭行

秋如ゟ傷ゟ何をする人そ

清水寺の茶店まで送ひらるるとて
男乃ふつく所なるに
松風の軒を笑ふて秋ぞ来ぬ
風乗まつ泥亦集此語俚
なる村所思
志水二代目屋行人
もとに変やしとそ
山道や行人なしに秋の来
人声や虫を聞うへはあきの雲
其物寄
秋もはやつくつく法師雪の形
畦山寒まて月に兎を追ふ
題を置て
月もむや 狐こんこん 吠る家
十月廿日病中吟
寒水二行うかぶる
氷と書て後まで
やるとか云
土芳曰此句と春秋の
二句合点そもや
卜島ふし白とそ
狩よ病と 夏を こうる礼
生芳曰此句と春秋の
二句合点そもや
新葉の出を 笑ふ 岩木哉
花木崖 さくらわう へ乃うさし礼
人の方へ好て行ふ
後見出す句多き

大りうと礼和のをわら村雨う雷

也木亭

藥のね乃紫麦趣る蝶のね

紫陽花や帷子時分雪踏哉

人よ帷子をもらひて

洗髪よき女ぞうらやむ

髪花と者

いてやわ礼よき布着うり蝉の声

義潅無井弁みな指捉みうちに

冬籠して

俤未改庭をいさ免るこ礼の雪

日某新ハちまち乃二月十三日

猫の子の

猫丸子共

方へ十巻し礼一家お礼雪里

梅のつぼむうるし改一家お礼雪里

鄙ち麦撲ふや水打う〳〵

い也麦乃江ち麦のむら尾京

村多まくら筋赤まなら陽う礼

麦尺礼と育ね礼れそ女房花

玉川改水よ撲ちおやる規

撲やまつおすひ出そ駒むう〳〵

尽ち新やまち作ちも青月夜

雑魚寝宝夏之月

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104

ガラス使用

秋海棠西瓜の色も笑ふ哉

もろこしや新詩の森乃雨ちう〳〵

音瀬の漁火ともる題をとりて

篝火にうしのやはらぎ行みづむせひ

梅咲や子よろこふ父の帰る

真徳義の讃

北さる名や考ぬ郎中

雁さはく羽弦田面や竈の雨

よもすがらくや帆柱さむき人にうれ

煤おりて恨さく家ふちくつさ迄

鐘撞ぬ里や何をう事のさ径

曙やまさ朝日かやこきん

不卜子母追悼

水向るもおろ〳〵ひ郎へ道的寺

赤武より上りて人くさ寒す

赤坂の毛もそろ〳〵しく床まで

影新乃花よ峰ゆく牧郎よう

木を伐るおと又さやふの月

うり跡や物よまれぬ蕎麦ばたけ

淀梅や一ひらさくふ務のつら

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104　　ガラス使用

森の実を祝詞せん花ぬあと

路通ふたりのくらに趣く舟

客枕おそや秋を花ぞしてまよ

木母寺まえ牛腰日

降きとも牛植うる日や笠と笠

牡蛎殻行を送りて

見送りぬうしろや秋の風

畫讃

鶺鴒やそれあまよ色蓬

鶺鴒やそれあまよ色蓬



春雨に出かねつまき

むら咲やきうく春の京都

浅香の里ももる花つまき

海苔汁の実像色々浅黄桃

多く飽と中人ぞ花もはし

多のさくら咲ぬまつさき

和歌や海も青田の一ところ

蓮池や杉くて牛車もとまる

仰ぐもて小家も秋物語

各月の歩をもとめ山

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104

ガラス使用

五ツ六ツ雀飛ぶみるうら山
海暮て雲雀の巣の遠き
須磨の浦此年ものの巣一把
越後の新潟
海もまた雨や遠しきさ方
五月雨を隠しもつさうつさ山



聖教中に書を清ふ
ひつ洗乃この句集を
校のあまり筆を執
おく北面道の行脚を
笛鍚杖もろ〳〵宇治
白こと乃妙院よ月さや
降やうま乙仲に
とゞに書てはおりうま
北独き筆のあと

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

863
104

14147

梓よりとゞて書林井筒屋庄兵衛代目の売ㇾ弘
あらん事をおもひまゐらせ候跡先雲川のおくり

佳言梅もとて　翠桂謹書

安永三午年七月

蕉門俳諧書林
井筒屋庄兵衛
寿梓

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『芭蕉翁発句集 2巻』 請求記号 863-104
ガラス使用